

中高年層の女性介護者にとっての介護に関する一考察
～ 介護経験とライフデザインに焦点をあてて～

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会行動クラスター

少子・高齢社会の進行の中で、我が国の高齢者介護を中心的に支えているのは家族介護である。その家族介護は、近年の家族構造や家族機能、扶養意識の変容などにより、その機能が脆弱化してきている。

しかし、旧来からの「イエ」制度は崩壊し、家族生活はより一層の「個別化」が進む中でも、依然として家族介護が第一義的役割を担っているのは事実である。その家族介護の中心は、妻・嫁・娘といった女性介護者となっている。中でも今日においては、50 歳代の女性介護者が全体の 3 分に 1 を占めており、今後は家族介護者の高齢化も心配される現状となっている。

そもそも在宅での高齢者介護は、ほとんどの場合が日常生活の中で突然起こることが多く、介護を担った家族介護者を含めてその家族のライフスタイルや生活リズムに影響を及ぼしかねないライフイベントとなっており、筆者は在宅介護が終了した後にも何らかの影響をもたらすものではないかと考える。

そこで本研究では、通常数ヶ月から数年に及んだ在宅介護を経験した家族介護者（在宅介護経験者）を対象に、家族介護者としての役割から解放された後の人生や日常生活はどの様になっているのかということに注目した。具体的には、在宅介護経験者である女性 5 名を対象としたインタビュー調査を実施し、彼女らの家族介護者としての心情を理解するとともに、自らの介護経験がその後のライフデザインにどのような意味や影響をもたらすものであるのかについて明らかにすることで、我が国の高齢者介護の中心的担い手である中高年層の女性介護者にとって介護とは何かについて考察した。

今回の研究で調査対象とした在宅介護経験者は少数であったが、彼女らの多くが自らの介護経験を肯定的に受け止めておられ、彼女らのうち数名はホームヘルパーや宅老所開設といった高齢者介護に携わる職業に転身されていることが分かった。彼女らが、在宅介護を終了した時期は 40 歳代後半?50 歳代であり、その後のライフデザインを構成するにあたって、自らの介護経験が最も身近な要因として関係していることが、今回の調査からは明らかになった。

従って、中高年層の女性介護者にとって介護は、その後のライフデザインを構成していく上で、少なからず影響を及ぼすものとなり、場合によっては職業選択の動機づけにも関与するものであることが示唆された。